

KURODA  
TAIZO

黒田泰蔵さんの白は、真理を求めてやまない心の色である。—安藤忠雄

The Museum of  
Oriental Ceramics, Osaka

Dates: November 21, 2020 - July 25, 2021

Organized by: The Museum of Oriental Ceramics, Osaka  
Sponsored by: Ito Foundation  
With the cooperation of: ICA, ICAFO  
Most interesting: Featured Exhibition  
\*KALEIDOS: Selected Works from the "Innocence" Collection\*

黒田泰蔵  
大阪市立東洋陶磁美術館  
2020.11.21 (sat) — 2021.7.25 (sun)

主催：大阪市立東洋陶磁美術館  
協賛：イソ財団  
協力：ICF、ICFO  
問い合わせ：大阪市立東洋陶磁美術館 Phone: 06-6723-8000  
同時開催「陶藝塾下栢右衛門—Yamamoto Senkemon—」

〒590-0001  
大阪府堺区  
堺  
東区  
大宮  
〒590-0001  
大阪府堺区  
堺  
東区  
大宮  
〒590-0001  
大阪府堺区  
堺  
東区  
大宮

本展覧会は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、入場者数を制限し、入場予約制とします。  
観覧券は、本展覧会専用サイトにて事前予約が必要です。  
観覧券の購入は、本展覧会専用サイトにて事前予約が必要です。  
本展覧会専用サイト: <http://www.moc.or.jp/exhibition/kuroda-taizo>  
本展覧会専用サイト: <http://www.moc.or.jp/exhibition/kuroda-taizo>  
本展覧会専用サイト: <http://www.moc.or.jp/exhibition/kuroda-taizo>  
本展覧会専用サイト: <http://www.moc.or.jp/exhibition/kuroda-taizo>  
本展覧会専用サイト: <http://www.moc.or.jp/exhibition/kuroda-taizo>



# 特別展「黒田泰蔵」

## 大阪市立東洋陶磁美術館

## ご挨拶

黒田泰蔵は1946年1月1日に生まれ、大阪市立工芸高校を経て、1966年にパリに渡ります。その滞在中に出会った陶芸家島岡達三の紹介で、カナダで陶芸を学び、陶芸家としての道を歩み始めました。1980年に帰国し、1991年からは静岡県伊東市にアトリエを構え、静謐で独特な白磁の制作を精力的に行っています。2019年には畏友安藤忠雄が設計した展示棟がアトリエに隣接して建てられました。

黒田泰蔵の白磁は独自の宇宙観を表わそうとするシンプルな造形を特徴とし、世界的に知られています。その造形は碗や壺、盤など伝統的なやきものの姿から出発し、極限まで装飾性を排除して、存在の永遠性を志向したミニマルなものです。黒田泰蔵の白磁には静けさと永遠性が感じられる独自の世界が広がっていて、茶碗や花生の面を残しつつも、工芸の域を超えて、純粹造形を志向しているのが感じられます。

本展覧会ではイセ文化基金所蔵作品と当館のコレクションを中心にして黒田泰蔵の近年の到達点である白磁の世界を紹介いたします。

本展覧会の開催にあたり、黒田泰蔵氏、安藤忠雄氏からご協力をいただくとともに、イセ文化財団からは多大なるご支援とご協賛を頂きました。また当館の活動をご理解くださり、作品をご寄贈くださいました大林剛郎氏、孫泰蔵氏、戸田博氏をはじめとして、関係各位の皆様方に心より御礼申し上げます。

大阪市立東洋陶磁美術館  
館長 出川哲朗

2020年11月

## 凡例

キャプションに付された作品番号は、展覧会の図録の作品番号と対応しておりますが、展示の順番とは異なります。

作品名、制作年、素材、サイズ（h: 最大高、w: 最大幅、単位はcm）、所蔵者、登録番号の順に記載し、英文を併記しています。



14.

黒田泰蔵

壺

2019年

白磁 h: 26.9 w: 21.2

大阪市立東洋陶磁美術館（孫泰蔵氏寄贈）

登録番号05655

黒田泰蔵は、白磁の制作を始めた45歳の頃に「轆轤成形、うつわ、単色」という条件を決めて制作するようになりました。轆轤で成形することによって、自律的に、回転体で縁の立ち上がるかたち—すなわち「うつわ」となります。かたちとしてのうつわは、必ずしも実用を前提としておらず、作家は、そのかたちを美しい抽象的な形態として捉えています。本作は、小さな口に張った肩をもち、胴裾にかけてすぼまる、黒田の「梅瓶」として知られるかたちです。丁寧に磨かれた滑らかな表面と、豊かな曲線による均整のとれたかたちは、黒田作品の特徴をよく表しています。



24.

黒田泰蔵

壺

2018年

白磁 h: 30.5 w: 27.1

大阪市立東洋陶磁美術館（大林剛郎氏寄贈）

登録番号05648

1966年に二十歳で渡仏した黒田泰蔵は、働いていた日本食レストランを訪れた陶芸家の島岡達三（重要無形文化財保持者（民芸陶器・縄文象嵌）、1919–2007）と偶然にも出会います。その後島岡に紹介された、カナダのケベック州の陶芸家ゲータン・ボードン（Gaétan Beaudin, 1924–2002）のもとで陶芸を始めました。黒田は当初、陶芸家を目指していたわけではありませんでした。初めて轆轤に向かった時に「これを一生やるかもしれない」と、すぐに夢中になったと回想しています。一時的に日本に帰国をした際には、栃木県益子の島岡のもとに滞在し、陶芸を学びました。黒田は1980年に帰国し、翌年には静岡県伊豆半島に築窯して制作の拠点を日本に移しました。白磁の作品を初めて発表した1992年からは、これが制作の中心となってゆきました。



29.

黒田泰蔵

鉢

2015年

白磁 h: 8.3 w: 22.5

イセ文化基金

黒田泰蔵の作品は、轆轤を用いた回転体としてのうつわのシンメトリーな造形を基本とします。一方で、古染付を思わせるような、口縁部の傾いた不均衡な器形の鉢や、あえて均整を崩すような作品も見られます。

黒田の作品は、茶席の道具としてもしばしばとりあげられてきました。緊張感あるそぎ落とされた造形と、白く神聖な雰囲気好まれたとすることができるでしょう。



(中央)

40.

黒田泰蔵

壺

2003年

白磁 h: 34.0 w: 6.5

イセ文化基金

黒田泰蔵は白磁の作品を制作し始めた当初は、作品の全体に透明釉を掛けていましたが、轆轤成形時のシャープさを焼成後にも保つために、1997年頃から酸化焼成で無釉の作品を試み、数種類のサンドペーパーで研磨して仕上げるようになります。

複数の作品を組み合わせて配置する方法は、初めての作品集『White Porcelain 黒田泰蔵白磁作品集』（アムズアーツプレス、2001年）の写真にも見られます。こうした作品の見方は、英国の陶芸家エドモンド・ドゥ・ヴァール（Edmund de Waal, 1964-）による、円筒形の陶磁器を多数組み合わせるインスタレーション作品なども想起させます。それぞれの作品が互いに呼応するような関係性を、見る者に想像させます。



16.

黒田泰蔵

壺

2019年

白磁 h: 28.7 w: 17.8

イセ文化基金

黒田泰蔵はこれまで、「梅瓶」など陶磁器の伝統的な器形を、作品名として箱書などに記してきました。「花生」は、近年「花入」という名称に代えて使われています。一方で最近では、伝統的な作品を想起させるような名称を使用することには疑問を感じつつあると言います。作家は、常に現代性を意識して創作活動をおこなってきました。「私が今日作ったものだとしても、時を経て美しく変化したものとあまり変わらないようなもの」を作らなければいけないと言い、それらを「本当の言葉が宿っているようなもの」と表現しています。





45.

黒田泰蔵

壺

2019年

白磁 h: 29.8 w: 12.6

大阪市立東洋陶磁美術館（戸田博氏寄贈）

登録番号05659

筒形の胴部に円錐形を被せたような、独特なシャープなカタチです。特に口縁部はゆるやかに波打ちながら、薄く繊細に成形されています。黒田は、「直接自分の手、指と轆轤を使うことでまるで魔法のように空中に線を引くことができる材料」に魅了されたと言って、轆轤で成形することについて「一度きりの抽象絵画を空中に創出する」ことに例えています。一見すると幾何学的でミニマルに思われる造形ですが、表面には轆轤目と研磨された跡が残され、豊かな質感と微妙なニュアンスが含まれていることに気づかされます。



6.

黒田泰蔵

円筒

2013年

白磁 h: 9.5 w: 8.5

イセ文化基金

黒田作品を代表する造形が「円筒」です。轆轤の回転運動によって、垂直に引き上げられた円筒形は、円と直線で構成されるシンプルなかたちです。極めて薄い口縁部は、低速で回転する轆轤で成形され、釉薬を掛けない表面は丁寧に磨かれています。轆轤によって人の手で創られるものとしては、これが緊張感を維持し得る適当な大きさなのかもしれません。円筒には、「見えるもので、見えないものを現す」ことによって作家としての責務を果たす、という黒田の思いが込められています。美しい円筒は、作家の理想を具現化しようとする表現だと言えるでしょう。



64.

黒田泰蔵

円筒

2012年

白磁 h: 9.5 w: 12.5

作家蔵

黒田が「円筒」の制作を始めたのは、東京国立近代美術館工芸館で開催された「現代の座標—工芸をめぐる11の思考」展へ出品した2012年頃だとされます。作家は白磁の制作を始めてから「白磁の究極的な考え方は、つくらないことじゃないかとさえ思う」と述べていますが、「円筒」に取り組むことでこの葛藤を克服しつつあることが窺えます。「円筒」は日常的に見慣れたかたちでありながら、薄く真っ白な物体は生活空間には異質でもあり、用途や目的は曖昧で、言葉の上での分類や境界を明確に示すことは難しいものです。しかし、ものとしてただ「ある」ことができます。黒田が円筒について書き留めたことの一つに「人々の言語化されない、出来ない意識の表言（例えばYesとNoの間、有と無の間）」とあるように、かたちによって言葉を超えた思考の機微を表せる可能性に気が付くことで、作家は矛盾を受け入れてその葛藤を昇華させたと言えるでしょう。



4.  
黒田泰蔵  
円筒  
2016年  
白磁 h: 8.5 w: 9.5  
イセ文化基金

黒田泰蔵はインタビューのなかで、「円筒」ひとつだけの展覧会の構想を次のように語っています。それは「ジョルジュ・ブラック (Georges Braque, 1882–1963) が使っていたというテーブルに、どこかから良いナイフとフォークを探してきて置き、『円筒』をその真ん中に置いて、ナイフとフォークを道具の象徴、『円筒』をうつわの象徴、そしてテーブルのどこかにガリレオ・ガリレイ (Galileo Galilei, 1565–1642) の『太陽黒点論』 (1613年) を知の象徴として置く」というものです。これはイタリアの古書店で『太陽黒点論』を入手したかったというエピソードとともに語られた構想です。



51.

黒田泰蔵

割台皿

2018年

白磁 h: 22.5 w: 35.6

イセ文化基金

小さな高台から、ゆるやかな曲線を描いて上部にかけて広がるかたちは、重心が上にくることで軽やかな浮遊感があります。天板には、焼成前に意図的に大きな割れ目が入れています。「破袋」として知られる伊賀焼の水指のような、やきものの窯割れを想起させる一方で、ルーチョ・フォンタナ (Lucio Fontana, 1899–1968) が《空間概念》で「芸術に新しい次元を生みだし、宇宙に結びつくこと」を求めたこととも通じます。作品の纏う静謐な空気を破るように、力を加えられて鋭く裂けた切り口の表現は、他の作品とは逆のアプローチを模索する作家の試みかもしれません。



47.

黒田泰蔵

壺

2007年

白磁 h: 30.0 w: 37.3

イセ文化基金

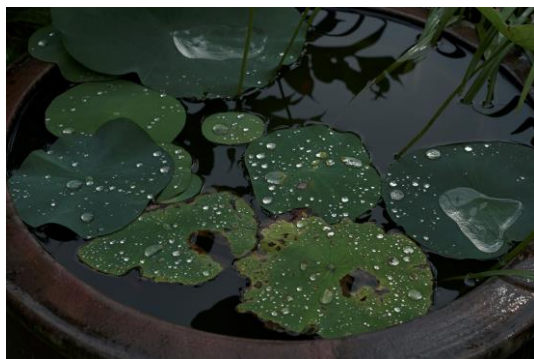
上部に小さな口をもつ円錐形は、中は空洞で確かにうつわですが、轆轤成形によるかたちとしてはあまり類例がありません。円錐は、真横から見ると三角形ですが、立体としては曲面によって構成されます。単純な構成要素のうつわは、空間や隣り合うものと呼応して、見る者に自由な解釈を促します。黒田は、「白磁という方法論をもって真理を知りたい」と言います。黒田の創作活動は、社会現象を映すような現代美術のアプローチとは異なり、真理の探求という思索を、現実にかたちを持つものによって表現する試みなのかもしれません。

黒田泰蔵は、1991年に静岡県伊東市富戸に築窯し、創作活動の拠点としてきた。広大な敷地には、轆轤を据えた工房、作業場、安藤忠雄設計による展示棟（ギャラリー）、現在の住居、以前に暮らしていた建物があり、豊かな自然を感じられるアトリエの庭からは、正面に伊豆大島、眼下に城ヶ崎の灯台を望むことができる。

富戸に引っ越してきたとき、僕は制作に行き詰っていた。それがアトリエづくりや庭づくりをしているうちに、白磁を見つけることができた。僕にとってアトリエづくりや庭づくりは、脳をクリアにしてくれる、瞑想のようなものなのかもしれない。

（黒田泰蔵『黒田泰蔵 白磁へ』平凡社、2017年、26頁）

こうした黒田の言葉から窺えたとおり、作家自身の手によって整えられた空間からは作家の美意識と世界観を感じることができる。





特別出品

安藤忠雄

ドロ잉グ 水の展示室

2018年

個人蔵

黒田泰蔵は、作品を展示するための展示棟（ギャラリー）を2019年に工房に隣接して新設した。この設計を担ったのは、建築家の安藤忠雄である。黒田と安藤は1997年に知り合ったといい、2008年の「デザイン・マイアミ／バーゼル」（スイス）では、展示設計を安藤が担当した。本ギャラリーでは床に水を張ることができ、黒田の作品は水に浮かぶかのように展示される。作品は水面に写りこみ、水の揺らぎに合わせて作品が空間に溶け込むような印象を見る者に与える。





Photograph: T. MINAMOTO